HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小川未明の総合的再考 : 詩業と思想展開を中心として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	増井, 真琴
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13409号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74467
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Makoto_Masui_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　増　井　真　琴

主査　教　授　中　村　三　春
審査委員　副査　准教授　水　溜　真由美
副査　准教授　野　本　東　生

学位論文題名

小川未明の総合的再考　――詩業と思想展開を中心として

・当該研究領域における本論文の研究成果

小説家・童話作家として知られる小川未明は主として大正期に執筆したロマン主義的な童話作品が代表作と見なされ、鳥越信・古田足日らによって児童文学界で巻き起こったいわゆる「未明論争」（近代童話の伝統批判）も、また柄谷行人の「児童の発見」（『日本近代文学の起源』所収）における児童文学批判も、いずれもそれらの大正童話のみが焦点とされていた。それに対して近年、小埜裕二が中心となって全集未収録の未明作品の書誌の解明と本文の復刊が進められ、一二〇〇編に及ぶ作品が新たに発掘された。本論文はこれらに加えて申請者が自ら調査発見した初期の漢詩などの新資料を駆使し、明治に生まれ昭和戦後期までの間に童話・小説・評論を含め三〇〇〇編以上の厖大な作品を著した未明の業績の総体を、改めて全面的に見直すことを最大の目標とするものである。特に、これまで十分に検討されたことのなかった、未明若き日の漢詩と近代詩について初めて本格的に取り上げ、作家様式の基礎としての位置づけを明確にした点については特筆に値する。すなわち漢詩の押韻や平仄、近代詩の修辞やイメジャリーなどの表現と題材について、統計的な手法をも用いて具体的に解明し、爾後の小説・童話作品との繋がりも論じた高度な達成を収めている。

また本論文がもう一つの大きな課題としたのが、大正・昭和初期、昭和戦前期、そして戦後期にかけて、社会主義から国家主義、さらに戦後民主主義へと極端に主張を変えた未明のいわゆる転向・再転向問題にほかならない。このことについて申請者は、(1) 従来アナキストとされていた昭和初年代までの未明が、実際にはマルクス主義にも強く共鳴していたことを「時計のない村」や「血の車輪」などの童話の分析から解明し、(2) 小説の筆を捨て童話に専念するとした「童話作家宣言」が、マルクス主義運動からの離脱を意味していたことを同時代言説をも参照して明らかにし、(3) これまで知られてはいたが正面から論じられることのなかった戦中期の国家主義への転向の事実を、「僕も戦争に行くんだ」や「兄の声」などの童話作品や評論、さらに国策協力団体である日本少国民文化協会との関わりなどから克明に追究し、(4) 戦後には時流に迎合する形で民主主義を唱導し、児童文学界の大家としての地位に安住して晩年を迎えたことを、絶筆の童話「ふく助人形の話」などに触れつつ、反省なき再転向として批判的に論じた。これらはいずれも学界の研究史において新見を示すものである。

以上のことから本論文は、作家小川未明の研究はもちろんのこと、未明研究を中心として進められてきた日本近代童話の研究においても、画期的な研究成果をもたらすものと認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、未明の諸作品に対する徹底した文献的考証の上に、色彩や風土、鳥・時計・汽車・航空兵などの表現・表象に関する文芸的な分析を積み重ね、長きに亙って活動した未明の業績の全体像を明らかにした労作である。特に初期の漢詩・近代詩について初めて追究の対象とし、ほとんど論じられていなかった戦中・戦後期の発言や童話作品の詳細な解明を行うことによって、これまで大正期のロマン主義的な童話作品によってのみ評価されてきた未明の文芸活動について、総体として根本的に再検討を加えている。特に、社会主義から、国家主義、さらに戦後民主主義へと転向・再転向を繰り返した未明の事績を、作品と社会的活動とを克明に追跡して批判的に究明し、これまで大正童話中心主義によって作り上げられてきた未明研究の通説を、その思想遍歴を俎上に据えることで根本から覆した。これらの点はいずれも新見と言えるものであり、これにより本審査委員会は本論文を高度な達成を遂げた研究として評価するものである。

なお、審査の場においては、本論文に関してなお不十分と思われる諸点も挙げられた。すなわち、（１）本論文は新資料や従来論じられていない作品を対象とすることに注力しているが、逆に大正期童話の新たな評価や従来の未明論との接続も必要であったのではないか、（２）漢詩・近代詩の習作期から社会主義の時代までの間に論述上の空白期があり、それをどのように埋めるのか、（３）無反省な転向・再転向を繰り返した作家として未明に対する厳しい批判的な追及を行っているが、むしろこのような作家の非凡性を評価する観点をも導入するべきだったのではないか、などである。しかしこれらの要望は本論文の達成度の上にさらに求められる課題であり、本論文自体の論旨を否定するものではない。申請者が自ら今後の課題として挙げた方向性に基づき、小川未明および日本近代文学研究を持続することによって満たされるものと考えられる。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。